

## ドイツ語とフランス語における 複合時制の助動詞選択について

野 上 さ な み

### 0. はじめに

ドイツ語とフランス語で複合時制を作る際、過去分詞となる「基本動詞」が自動詞である場合には、この自動詞の意味や文脈に応じて、助動詞の選択が起こる。助動詞として用いられるのは、フランス語の *être/avoir* およびドイツ語の *sein/haben* という動詞のペアである。*être* と *sein* はともに存在や状態を叙述する動詞で、*avoir* と *haben* は所有関係を叙述する動詞である。複合時制で利用される際には、4 つともオリジナルの意味を離れて助動詞として使われる。ドイツ語では、状態変化および場所の移動を表す自動詞に対しては助動詞として *sein* が用いられる。しかし、この条件を満たしているすべての自動詞に関して *sein* の選択が必須とされるわけではなく、文脈に応じて *haben* が選ばれることもある。フランス語においても、必ず *être* の選択が義務付けられるタイプの自動詞群がある一方で、自動詞そのものの意味と文脈に応じて二つの助動詞 *avoir* と *être* の間で交替が起こるケースが多数ある。本稿では、現代のドイツ語の現在完了形とフランス語の複合過去形に焦点を絞り、自動詞を基本動詞としてこれらの形式が作られる場合の、助動詞選択の基準を比較検討することで、両言語間の共通点と相違点をさぐる。

### 1. 助動詞の選択基準について

まず、フランス語の複合過去形を作る際に助動詞として必ず *être* を選択する自動詞と、ドイツ語の現在完了形を作るときに必ず *sein* を助動詞として選択する自動詞が備えている意味論的特性を確認しておくことにする。

フランス語の自動詞のうち、複合過去形を作る際に助動詞として *être* の使用が必須となっている自動詞の共通点は何であろうか。朝倉(2002:p.88)は、具体例を挙げたうえで『少数の自動詞』とだけ記述し、田辺(2007:p.246)は『少数の自動詞—主とし場所や状態の変化を示す動詞である』と規定している。Reumuth & Winkelmann(1994:p.279)は、運動を表す自動詞については『intransitive Verben, die eine Bewegungsrichtung ausdrücken (動きの方向を表現する自動詞)』と明確に限定する記述をしているが、それ以外の自動詞については共通点を述べず個別の具体例を列挙するにとどめている。目黒(2000:p.246-247)は、まず *être* を取るのは「移動または状態の変

化を表す自動詞」と明言した上で、さらに助動詞の選択は自動詞の性質に支配され、完了動詞は *être* をとり未完了動詞は *avoir* をとり、と付け加えている。本稿ではまず、複合過去形を作る際に *être* が必ず使われる自動詞を、「場所の変化」を表す自動詞 F1 と「状態変化」を表す自動詞 F2 に 2 分類する。場所の変化を表す F1 の自動詞はどれも、動詞の語彙に「移動の方向」が含まれているタイプのものであることがわかる：

- F1 *aller* (行く), *arriver* (到着する), *entrer* (入る), *descendre* (降りる), *partir* (出発する), *rentrer* (帰る), *rester* (とどまる), *retourner* (戻る), *sortir* (出る), *venir* (来る), *parvenir* (達する), *revenir* (再び来る), *tomber* (落ちる)  
*monter* <sup>注1</sup> (上る),
- F2 *décéder* (逝去する), *mourir* (死ぬ), *naître* (生まれる), *devenir* (なる), *intervenir* (発生する), *survenir* (勃発する), *éclore* (孵化する), *demeurer* (存続する), *echoir* (期限が来る),

ドイツ語において完了助動詞として必ず *sein* を選択するのは、「状態や場所の変化」を表現する自動詞とされる (DUDEN:1998, HENTSCHEL & WEYDT:1990)。これは、自動詞の *Aktionsart* に応じて完了の助動詞が決定されるとする考え方である<sup>注2</sup>。フランス語の場合と同様のやり方で、「場所の変化」を表す自動詞を D1、「状態変化」を表す自動詞を D2 として、次のように分類する。D1 は F1 と同様、移動の方向が動詞の語彙に含まれるタイプの自動詞となっている：

- D1 *gehen* (行く), *ankommen* (到着する), *eintreten* (入る), *abfahren* (出発する), *zurückkommen* (帰る), *bleiben* (とどまる), *zurückkehren* (戻る), *ausgehen* (出る), *kommen* (来る), *fallen* (落ちる), *steigen* (上がる・登る)
- D2 *sterben* (死ぬ), *gebären* (生まれる), *verderben* (腐る), *aufblühen* (咲く), *frieren* (凍る), *verrosten* (錆びる), *platzen* (破裂する), *explodieren* (爆発する), *werden* (なる),

D1 で挙げたドイツ語の自動詞は、完了形式を作る際に助動詞として必ず *sein* を選択し、*haben* が用いられることはない。D2 に属する自動詞群でも、わずかな例外<sup>注3</sup>を除いては *sein* のみが助動詞として用いられ *haben* は使うことができない。

ここまでの例を見る限り、両言語で助動詞が固定化している自動詞の基準は、「場所あるいは状態の変化を表すもの」ということで一致しているように見える。しかし、状態変化を表す自動詞に関しては、次のような大きな違いが見られる。ドイツ語で状態変化を表す自動詞では、変化の在り方がどのようなものであるかに関わらず、使われる助動詞は必ず *sein* でなければならず、*haben* と組み合わせて完了形式を作ることは許されない。そのため、状態変化が特定時点に起こる自動詞

((1)①)であっても、次第に進行していくタイプの自動詞((1)②・③)であっても、助動詞としては *sein* しか共起できず *haben* が排除されるという点には変わりがない:

- |   |                |
|---|----------------|
| ① Mein Hund <u>ist</u> /* <u>hat</u> im Dezember gestorben.   | 私の犬は 12 月に死んだ。 |
| (1) ② Die Rosen <u>sind</u> /* <u>haben</u> aufgeblüht.       | バラが咲いた。        |
| ③ Der Fluss <u>ist</u> / * <u>hat</u> in eine Nacht gefroren. | 川は一晩で凍った。      |

これに対してフランス語では、状態変化の自動詞のうち *être* を使うことが義務付けられているのは F2 で挙げた動詞に限られていて、これ以外の大多数の状態変化を表す自動詞は、*avoir* を用いることとされている。実際 Reumuth & Winkelmann(1994:p.279)は、*être* を含むほとんどの自動詞は *avoir* と組み合わせて使う、と述べている。「腐る」という意味の自動詞、ドイツ語の *verderben* とフランス語の *pourrir* を比べてみると、ドイツ語では必ず *sein* が助動詞となるが、フランス語では *avoir* を使う:

- |                                       |          |
|---------------------------------------|----------|
| (2) ① Der Apfel <u>ist</u> verdorben. | リンゴが腐った。 |
| ② Les fruits <u>ont</u> pourri.       | 果物が腐った。  |

つまり、フランス語で「変化」を表す自動詞には、F1 (*être* とだけ共起する場所の変化動詞)・F2 (*être* とだけ共起する状態変化動詞)に加えて、「状態変化を表すが、助動詞として *avoir* を用いる自動詞」という第 3 のグループ F3 があることが分かる。助動詞の使い方に応じて、変化を表す自動詞が 3 つのグループに分類できるということである。さらに着目すべきことは、この *avoir* を助動詞として使うことが一般的であるとされる状態変化の自動詞群 F3 は、*être* を助動詞として使うこともできるという事実である。3 つのグループをまとめると次のようになる:

#### フランス語の変化を表す自動詞

- |                              |                       |
|------------------------------|-----------------------|
| F1: <i>être</i> を使う場所変化の自動詞  | — <i>avoir</i> の使用は不可 |
| F2: <i>être</i> を使う状態変化の自動詞  | — <i>avoir</i> の使用は不可 |
| F3: <i>avoir</i> を使う状態変化の自動詞 | — <i>être</i> の使用も可能  |

ここまでの内容をまとめると、ドイツ語の状態変化を表す自動詞では、助動詞として *haben* の使用が認められないのに対して、フランス語では、*avoir* と *être* 両方を助動詞として使うことが可能だということになる:

- |   |                                    |
|---|------------------------------------|
| (2) ③ Der Apfel <u>ist</u> /* <u>hat</u> verdorben.   | <i>haben</i> の使用は不可                |
| ③' Les fruits <u>sont</u> pourris/ <u>ont</u> pourri. | <i>être</i> / <i>avoir</i> ともに使用可能 |

(2) ④ *Meine Bemühungen sind/\*haben misslungen.* *haben* の使用は不可  
私の苦勞は失敗に終わった。

④' *Tout les moyens sont échoués /ont échoué.* *être/avoir* ともに使用可能  
すべての手段は失敗に帰した。

つまり、フランス語ではほとんどの状態変化の自動詞(F3に相当する)が *être* と *avoir* の両方と組み合わせることが可能であり、*être* としか組み合わせられない F2 の自動詞群はむしろ少数派ということになる。さらに、辞書などの記述に基づけば、この助動詞の選択は動詞が備え持つ意味のうちどの要素に重点を置いた表現を作りたいのか、という話者の主観に応じて行われるという。第2節では、このフランス語の状態変化の自動詞における *être* と *avoir* の使い分けについて考える。

## 2. 状態変化の自動詞における助動詞の交替について

フランス語の複合形式が基準時点以前の行為を表す場合には *avoir* を用い、基準時点までに完了した行為の結果である状態を表す場合には *être* を用いるという具合に、同一の自動詞に関しても文脈に応じて助動詞を明確に使い分ける傾向があることを朝倉(2002)は指摘し、そのために、ある状態に入ることを意味する動詞はすべて *avoir*, *être* をとり得ると述べている。該当する自動詞として朝倉(2002:p.87)が挙げている例をいくつか紹介する。太字表記で目黒(2000)も挙げている例を、さらに田辺(2007)も挙げている例には下線を引いて併記する:

F3 助動詞として *être*, *avoir* 両方を選択可能な自動詞

*apparaître* (現れる), *augmenter* (増える), *baisser* (低くなる), *cesser* (止む) *changer* (変化する), *chavirer* (転覆する), *commencer* (始まる), *crever* (破裂する), *croître* (成長する), *débordér*(あふれる), *déchoir* (下落する), *décroître* (減少する), *diminuer* (減少する), *disparaître*(見えなくなる), *empirer* (悪化する), *expirer* (期限が切れる), *grandir* (大きくなる), *grossir* (太る), *maigrir* (痩せる), *paraître* (現れる), *pourrir* (腐る), *rajeunir* (若返る), *sonner* (鳴る), *vieillir* (老いる)

これらの自動詞が組み合わせられる助動詞によって、文全体の意味が違ってくることを朝倉は(3)のような具体例を挙げて示している:

- (3) ① *Ce livre a paru le mois dernier.* この本は先月出た。  
② *Ce livre est paru depuis un mois.* この本は先月から出ている。

(3) ①・②ともに時を表す副詞句が共起しており、①の副詞句は過去の一時点を表し、②の副詞句

は過去の一時点から発話時点までの継続を表しているため、①はあくまでも完了時制としての用法であるのに対して、②においては、過去の一時点「先月」に起こった出来事そのものよりも、発話時点すなわち現在まで残存しているその結果としての状態に焦点をあて、その「状態」を直接叙述する形式である。次の2組の例文でも同様のことが言える：

- (3) ③ *La rivière a débordé deux fois cette année.* 川は今年2回あふれた。  
④ *La rivière est débordée.* 川があふれている。
- (3) ⑤ *Cet enfant a grandi pendant mon absence.* この子は私がいなくて大きくなった。  
⑥ *Comme il est grandi !* なんて大きくなったのだろう！

つまり、厳密にいうならば、この *être/avoir* の使い分けは、同一の時制形式に対する2つの助動詞のヴァリエーションと捉えるよりも、*avoir* はあくまでも複合時制を形成するために使われる助動詞であるのに対して、*être* を使った文は形容詞化した過去分詞を利用した「状態叙述」として捉えるほうが適切であろう。辞典類でのコメントでも、この2つの助動詞の使い方の違いを説明するために、「動作を表すときは *avoir*、状態を表すときは *être*」という表現が使われている。同一の出来事の進行のプロセスに焦点を当てる場合には *avoir* を使い、その結果として現れる状態に焦点を当てた表現を作りたい場合には *être* を使うという、文全体の解釈に応じてふたつの使い分けを行うシステムとなっているといえよう。出来上がる文に意味論的な相違がある点についてはこの朝倉(2002)<sup>註4</sup>の考え方に従いつつ、便宜上 *être・avoir* の両方とも、引き続き「助動詞」と呼ぶことにする。

2つの解釈と2つの助動詞の選択について確認してきたが、ここでもう一度、*être* しか助動詞として使えないタイプの自動詞に立ち戻って情報を整理しておきたい。第1節で取り上げた、必ず *être* を助動詞とする F1・F2 の自動詞群は、第2節で取り上げた F3 の自動詞のように、解釈の違いに応じて共起する助動詞を使い分けることはできないタイプの自動詞である。いわば完了か状態かという解釈の揺れを言語形式のレベルで明示することを許さないタイプの自動詞であるといえることができる。しかし F1 に含まれる自動詞として文法書でも紹介されている場所移動の自動詞 *descendre, tomber, sortir* などについて、この原則に反するような興味深い解説がある。

この「場所の変化」を表す3つの自動詞は、『*être* (だけ)を助動詞とする自動詞』としてはっきりと紹介してある文法書がある一方で、2つの助動詞を両方使い分けることができるとの記述をするものも見られる。田辺(2007)は、意味によって助動詞を使い分ける自動詞について「大体において動作に主眼をおくときは *avoir*、状態に主眼をおくときは *être* というように識別される」と述べている。それを示すために挙げられている例文に *descendre* と *tomber* が使われており、それが(4)である。

このうち *être* を用いている①'・②'は、直接状態を叙述している例文(3)②・④とは明らかにニュアンスが異なる印象を受ける。(4)①'・②'は状態を直接叙述する文というよりは、出来事の(後に残る)影響に何らかの重点を置いてはいるが、あくまでも複合時制としての表現という方が正確で

あろう。特に(4)①'には過去の1時点を示す副詞句 *à sept heures* (7時に)が共起していることから、発話時点での状態を叙述しているとは言えない:

- (4) ① *Il a descendu bien promptment vers la Seine.* 彼は足早にセーヌ河の方へ降りて行った。  
①' *Je suis descendu à sept heures ce matin.* 私は今朝7時に降りてきました。  
② *La pluie a tombé à torrent.* 雨が奔流のように降った。  
②' *Je suis tombé et me suis fait mal.* 私は転んで怪我をした。

*être* を使った文の意味が(3)②・④とは若干異なるとはいえ、これらの例では、同一の自動詞が2つの助動詞を使い分けていることは確かである。しかし、こういった使い分けに関して仏和大辞典は、*descendre*:「助動詞は *être*; 行為を表すのに *avoir* を用いるのは古い用法である」、*tomber*:「助動詞は *être*; 古くは、動作は *avoir*、状態は *être* としたことがある」と解説して注意を促している。すなわち、*descendre* や *tomber* はかつて F3 の自動詞群のように助動詞の使い分けを行っていたけれども、次第に *être* だけを助動詞として使うようになり、結果として現在では F1 に属するようになった動詞であるといえるだろう。

さて、フランス語において状態変化を表す自動詞が、2つの助動詞の使い分けをする現象を確認したところで、ドイツ語との違いをまとめてこの節を閉じることにしたい。ドイツ語では、状態変化を表す動詞が使う助動詞は *sein* 1 つに固定化されているため、状態叙述と完了時制の解釈の相違を、言語形式上で区別することができない。つまり、いずれの解釈が選ばれているのかは、周囲の文脈でしか判断することができない:

- (5) ① *Das Messer ist sehr schnell / schon lange verrostet.*  
ナイフが すごくはやく錆びてしまった / もうずっと錆びている。(切れが悪いのは前からです。)  
② *Die Tomaten sind in einigen Tagen / seit 1 Woche geriffen.*  
トマトが 2-3 日で熟れた / 1 週間前から熟れている。

フランス語でも話者によって個人差があるため、状態を叙述するために必ず *être* を使うとは限らないようであるが、完了なのか状態叙述なのかという違いを形態上区別することが可能であるといえる。

### 3. 方向規定のレヴェルと助動詞の選択について

本節では、「場所の変化」と助動詞の交替の関係について考えてみたい。まず、場所の変化を表す自動詞のうち、フランス語で必ず *être* を助動詞として選択する F1 の自動詞群とドイツ語で必ず *sein* を助動詞として選択する D1 の自動詞群をもう一度挙げる:

F1: *aller* (行く), *arriver* (到着する), *entrer* (入る), *descendre* (降りる), *monter* (上る)  
*partir* (出発する), *rentrer* (帰る), *rester* (とどまる), *retourner* (戻る), *sortir* (出る),  
*venir* (来る), *parvenir* (達する), *revenir* (再び来る), *tomber* (落ちる・下がる)

D1: *gehen* (行く), *ankommen* (到着する), *eintreten* (入る), *abfahren* (出発する),  
*zurückkommen* (帰る), *bleiben* (とどまる), *zurückkehren* (戻る), *ausgehen* (出る),  
*kommen* (来る), *fallen* (落ちる), *steigen* (上がる・登る)

どちらの自動詞群ともに、*avoir* および *haben* を助動詞とする文は非文法的となる:

Je suis/* <u>ai</u> <i>allé</i> à Paris l'année dernière.	私は去年パリへ行った。
Une lettre lui <u>est</u> /* <u>a</u> <i>arrivée</i> de Paris.	手紙がパリから届いた。
La rent <u>est</u> /* <u>a</u> <i>tombée</i> de trois francs.	国債が3フラン下がった。
Ich <u>bin</u> /* <u>habe</u> <i>gestern</i> zur Uni <i>gegangen</i> .	私は昨日、大学に行った。
Das Paket <u>ist</u> /* <u>hat</u> <i>gestern</i> <i>angekommen</i> .	小包はきのう到着した。
Der Luftballon <u>ist</u> /* <u>hat</u> <i>plötzlich</i> <i>gefallen</i> .	気球が突然落ちた。

F1 と D1 にまとめた自動詞は、運動や移動の方向があらかじめ動詞の語彙内部に組み込まれている *direction verb* (LEVIN & RAPPAPORT HOVAV: 1992) である。動詞の意味構造の中に含まれるこういった方向規定は *Telizität* として機能するという考えを TENNY (1987) が提唱している。ドイツ語の状態変化を表す自動詞においては、主語名詞句が「状態変化」を被るという事実が、助動詞として必ず *sein* を選択させる要因になっているわけだが、ここに挙げた「場所の変化」の自動詞に含まれる方向規定も *Telizität* として機能するがゆえに、この「状態変化」と同等のステータスを持ち、そのためこれらの場所変化の自動詞に必ず *sein* を選択させる、ということを野上 (2000) で述べた。フランス語の自動詞群 F1 も、方向規定が語彙内部に含まれているものばかりなので、D1 の自動詞の場合と同様に、この方向規定が助動詞として *être* を必ず選ばせるのだと仮定することができる。

次に、移動の方向規定が動詞の語彙内部に含まれていないタイプの「場所変化の自動詞」について見てみよう。フランス語でこれに該当する自動詞群を FF とし、ドイツ語で該当する自動詞群を DD としていくつか例を挙げる:

FF: *courir* (走る), *marcher* (歩く・乗り物で行く), *nager* (泳ぐ), *voler* (飛ぶ), *ramer* (漕ぐ)

DD: *rennen* (走る), *laufen* (走る・徒歩で行く), *schwimmen* (泳ぐ), *fliegen* (飛ぶ), *rudern* (漕ぐ)

これらの動詞の共通点は、方向規定が語彙内部に含まれていないことと、移動のあり方 (Art und Weise) を表現している点にある。DD の自動詞は、動詞単独だと「場所の変化」を表すという点

では D1 と同じであるにも関わらず、*sein* だけに限らず *haben* を助動詞として完了形式が作られることも多い。つまり、移動を表現するという事実だけでは助動詞として確実に *sein* を選択する決め手には必ずしもならない、ということである。ドイツ語の「場所の変化の自動詞」においては、移動の方向規定が語彙に含まれていない場合、*haben* の選択を許してしまうということである。

Die Kinder sind/haben im See geschwommen.      子どもたちは湖で泳いだ。  
Die Leute sind/haben auf der Bühne getanzt.      人々は舞台の上で踊った。

このように「方向規定を語彙内部に含まない場所変化の自動詞」は助動詞として *haben* を受け入れる余地がある。しかし、副詞句を利用して自動詞の語彙の『外部』に方向規定の概念を付け加えた場合、助動詞の選択には大きな変化が生じる。移動の方向性をはっきりと示す副詞句が共起すると、DD で挙げた場所の変化を表す自動詞群は、必ず助動詞として *sein* を選択することになり、*haben* の選択は逆に許されなくなる。つまり、自動詞の語彙外部に新たに付け加えられた方向規定の概念が、必ず *sein* を助動詞として選択させるに足る要因となっていると考えることができる。方向規定の概念をもたらす副詞句を太字で記す：

Die Kinder sind/ \*haben **zum anderen Ufer** geschwommen.      子どもたちは向こう岸へと泳いだ。  
Die Leute sind/\*haben **auf die Bühne** getanzt.      人々は舞台上へと踊り出た。

フランス語でも同様の文を対照してみることにしよう。仏和大辞典に、*courir* の助動詞として *être* を用いるのは古い用法であるとの記述が見られるものの、FF で列挙したその他の自動詞について、助動詞の選択に関する特別なコメントは見当たらず、これらの場所変化の自動詞は未完了動詞と判断できるため、すべて助動詞は *avoir* を選択することになり、*être* とは共起しない：

J' ai /\*suis *marché* tout la journée.      私は一日中歩いた。  
L' avion a /\*est *volé* dix heures.      飛行機は 10 時間飛んだ。  
J' ai /\*suis *courru* ce matin dans le parc.      私は今朝公園を走った。

では、ドイツ語の場合と同じように、副詞句を使って自動詞の語彙外部に場所変化の方向規定の概念を新たに付け加えた場合も確認しておこう。ドイツ語との決定的な違いは、方向規定のフレーズを付加してもなお、助動詞が *avoir* のままであり、やはり *être* とは共起しないという点である：

J' ai /\*suis *marché* **jusqu' à la gare**.      私は駅まで歩いた。  
Dés qu' il ma vu, il a /\*est *volé* **vers** mois.      私を見るなり、彼は私の方へ飛んできた。  
A la nouvelle de sa maladie, j' ai /\*suis *courru* **chez** lui.      病気だと聞き私は彼のところへ駆けつけた。



『完了動詞は *être* をとり未完了動詞は *avoir* をとる』という目黒(2000)の見解に従うならば、文中に方向規定をする副詞句が共起しようとも、自動詞本体は未完了動詞なのだから、助動詞として選択されるのは *avoir* だけである。フランス語の自動詞においては助動詞の選択基準はあくまでも自動詞そのものの語彙内部に完了動詞としての性質が含まれていることが求められ、いわば「外付け」の形になる方向規定には *être* の選択をさせるだけの影響力がないことが分かる。

ドイツ語の場所変化の自動詞に関して、完了助動詞の選択を決定づけるのは動詞句全体に方向規定が含まれるか否かであるのに対して、フランス語の場所変化の自動詞についてこれを決定づけるのは、あくまでも自動詞本体に方向規定が含まれていることである。すなわちドイツ語では動詞句のレベルで助動詞が決定され、フランス語では自動詞の語彙のレベルで助動詞が決定されているといえる。

この節では、方向規定の概念が自動詞の助動詞選択に及ぼす影響を、フランス語とドイツ語について確認した。ドイツ語では、方向規定という概念が文中に共起するだけで、*sein* 選択を義務付ける決め手として働くのに対して、フランス語では、あくまでも動詞内部の意味論的構造に語彙の一部として方向規定が含まれない限り *être* が選択されないことを示した。方向規定の概念が動詞そのものの意味論的構造内部にあるかどうか、両言語の助動詞選択に違いをもたらしていることを確認した。

#### 4. 結論と課題

状態変化を表す自動詞の大部分について、ドイツ語では助動詞として *sein* が用いられ *haben* は認められないのに対して、フランス語では逆に *avoir* が助動詞として用いられるのが普通であり、*être* が使われるのは状態叙述を行うときである、という違いが確認できた。また、方向規定の概念が助動詞の選択に影響を及ぼすには、ドイツ語では動詞句のレベルにこの概念が含まればよいが、フランス語では動詞そのものの語彙のレベルにこの概念が含まなければならないという違いを示すことができた。

本稿では残念ながら、自動詞の助動詞選択という現象についての両言語の違いを、具体例を挙げて示すにとどまり、選択の基準に関して「動作や行為の完了・未完了性」以外にも目を向けた幅広い意味論的な考察に進むことができなかった。今後、名詞句の意味論的な性質なども絡めて複合時制形式の助動詞について、さらに検討を進めることが課題である。

## 5. BIBLIOGRAPHIE

- 朝倉季雄 (2002) : 新フランス文法辞典 白水社  
伊吹武彦ほか編 (1981) : 仏和大辞典 白水社  
田辺貞之助 (2007) : フランス文法大全 白水社  
野上さなみ (2000) : ドイツ語の自動詞における完了助動詞 *sein/haben* の選択と項の「Proto-Rollen の性質」について. In: 西日本言語学会編「ニダバ」第29号. p.38 - 47  
目黒士門 (2000) : 現代フランス広文典 白水社  
Drosdowski, G. (Hrsg.) (1998) : Duden 4 Grammatik. Mannheim/Wien/Zürich  
Henschel, E. & Weydt, H. (1990) : Handbuch der deutschen Grammatik. Berlin/New York  
Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1992) : The lexical semantics of verbs of motion.  
In: Roca, I. (ed.): Thematic structure: its role in grammar. Berlin/New York. p.247-269  
Reumuth, W. & Winkelmann, O. (1994) : Praktische Grammatik der französischen Sprache  
Tenny, C.L. (1987) : Aspectual interface hypothesis.  
In: Sag, I.A. & Szabolsci, A. (eds.): Lexical matters. Stanford, CA: SLA 24. p.1-27

### 注

- 注1: *monter* は *être* と *avoir* の両方を助動詞として用いる用法が確認されているが、それは *monter* に2つの意味があり、それぞれに応じて助動詞が使い分けられているためであると Reumuth & Winkelmann (1994:p.280) は特に解説を加えている。山に登るといった「場所の変化」の自動詞として捉えるケースでは *être* を用い、熱や価格が上昇するといった「対象の総量が増加する」と捉える事ができるケースでは *avoir* を用いるという具合に、意味内容に応じて助動詞が使い分けされている、という考え方である。これに従い、ここでは前者の用法としての *monter* を挙げている。
- 注2: Aktionsart 以外の意味論的特性を絡めた助動詞選択の基準も提唱されているが、本稿ではまず Aktionsart を出発点として議論を進めていくことにする。
- 注3: 具体的には *gären* (発酵する), *abtrocknen* (乾く), *altern* (老ける) などが挙げられる。
- 注4: ただし、F3 の動詞群においても常に助動詞が論理的に使い分けられるわけではないということも同時に指摘しており、行為を表すのに *être* が用いられたり①、状態を表すのに *avoir* が用いられる②ことも多いと付け加えている。そのため本稿では、ある自動詞が *être* および *avoir* とともに「共起しうるかどうか」という観点から論を進めることにする。

- ① Vous êtes peut-être passés par le parc?                      あなたはきっと公園を通ってきたんでしょう?  
② Je t'assure que tu as maigri.                                      ほんとに痩せましたよ。